



# 英語の学習のポイント

(音韻的再符号化と音韻ループの利用)

● 学習のポイントシリーズ(勝手に名付けましたが)も4回目になります。同じ文系科目ということで、社会と国語の回に紹介された内容を復習してみたいと思います。

● 八月の創学舎ニュースの社会の学習法の中で、「楽な勉強」「頭を使わない勉強」について触れていますが、英語の勉強でも、楽で効果性の低いやり方で時間をつぶしてしまうケースを目撃したことがあります。単語を眺める、英文空所補充の空所に入る答だけ暗記する、ワークの答を、「だってわからないから」ということで赤ペンで機械的に書き写す、等です。負荷が低いのでいくらでも机に向かえ、本人は勉強した気分になれるのかもしれませんが、部活でも、先輩が見ていないと、楽で負荷の低い、ずるい腕立て伏せをする仲間がいましたが、実際にはならないという点で似ていると思います。



● 九月の国語の回では「作業をしながら文章を読む」ことが説明されていました。大賛成です。英語の長文でもやってほしいです。ただ、線の引き方、囲み方は、個人の学習段階で差異が生じてくるかと思えます。陸上競技で言う「ストライド」に当たる、一度に掴める意味のまともな個人差があります。動詞だけでも囲ませたい、主語と動詞は囲ませたい、前置詞の前で区切りたい。教師サイドでも揺れている部分はあります(高校生と中3のコースによってはシステム化してあります。中3生は夏から使用している長文読解の副教材を是非参照して下さい)。実は私個人としては、線を引く目的は、ポイントの切り取りではなく、目の前の英語の文章に没入すること、自分の意識を文章内容につなぎ止めておくことにあります。都内の某有名難関進学校では、英語の長文問題は文を指でなぞりながら読め、という指導をしているそうで、やっぱりそうか、と思いました。

● さて、英語学習のポイントですが、文法理解、イデオム強化、リスニング、ライティング、読解力等、様々な項目のどの部分に注目するかというテーマの選択があります。書店に行くと、英語書籍の種類の多さに圧倒されます。ネットでもそうです。「英語学習」と検索すると、ものすごい数(広告も含め)がヒットします。どの視点から論じるのか、どのレベルをスタートラインとして設定するのかによって、学習方法のポイント・力点も違ってきます。今回は、創学舎のある一つの教材とシステムに絞って説明します。



● が、その前に、言語と文字についての確認。● そもそも文字とは音声を符号化(coding)したものであり、その文字を見て音声を喚起するのは再符号化(recording)ということになります。この音韻的再符号化に関しては言語学だけではなく、認知心理学等でも研究されています。最近明らかになっているのが、この再符号化(音

声化)を支えるメカニズムの中の、短期記憶の構造の重要性です。その短期記憶の説明でよく使われるワーキングメモリの下部構造には、視覚的情報を司る部分と、音声的情報を司る部分の二つがあります。音声面担当の方を音韻ループ(phonological loop)と呼びます。

● 我々は文字を見ると(母語、外国語に関わらず)その文字情報を頭(心)の中で音声化して音韻ループの中に蓄えようとするそうです。(頭・心の中の音声を内語:subvocalizationと呼びます。KOUNU:頭の中で音声化して可愛い動物を連想できたのではないのでしょうか。KUINO:音声化して?マークにたどりついたのではないのでしょうか)

● 人類はこの音韻ループを言語の獲得・発達とともに進化させてきたと考えられています。言語の発達と関係があるのですから、この音韻ループへの刺激は、語学の学習に欠かせない核心部になります。そこで語学の習得には音読・シヤドレーンが有効であり重要という考え方があります(※多くの考え方の中の一つです。内語が外国語習得のブレーキであるという説もあります)。

● 長くなりましたが、音読の効用、文字から音韻ループへの変換・刺激は認知心理学からの裏付けもされつつあるということで、先に述べた教材「英文テスト練習帳」の宣伝に入ります。紙面の都合で手短に。①日本語での意味が理解できている英文を、意味の区切れ毎にスラッシュを入れて、構造を掴みながら音読の練習ができる。②100点を取らないと不合格になるシステムでガリガリ書いて、さらに本番と同じテスト

用紙を利用して、本番さながらのリハーサルが何度でもできる。この2点だけでも、言語学や心理学の先生に褒めてもらえそうです。

● さらに、副次的かもしれませんが、英文テスト・英文練習が軌道に乗ってきた学生たちの共通点として、学習への粘り強さ、勉強体力の向上が顕著に見てとれます。実はこの体力、科目を超えて重要な財産になると確信しています。100点合格は大変かもしれませんが、その山を超えた先に素晴らしい可能性が広がると信じて頑張って取り組んでほしいと思っています。

※語学研究グループの中にも、音読肯定派と否定派があり、さらに中立派もあります。教材会社がスポンサーになって後援しているケースもあり、多種多様な現状です。(五日市)

## 子供の成績が親の幸せを左右する

● 週末になると、両親の前に正座させられ、一時間程、毎回説教をされる生徒がいた。なぜ勉強しないのか?こんな成績でどうするのか?お父さんもお母さんもこんな成績はとったことがない。これではろくな大学には行けないぞ。わかってはいるのか、お前の人生がかかっているんだぞ。いいか勉強というものはやれば必ずできるようになるんだ。

● そうよ。お母さんだってあなたのことを心配しているのよ。ちゃんということを聞いてがんばりなさい。あなたは、もともと頭はいいんだから。



やってやれないはずないでしょ。

●テストの度に、反省会がある家もある。点数が悪い時は、悲惨だ。容赦のない追求の言葉がとぶ。家に帰りたくないと言え、生徒を何人も見た。

●親がいうことは、当面の「勉強」に関しては、おおむね正論であることが多い。確かに親がいうとおりに出来れば、「勉強」はそこそこうまくいくだろう。しかし、動けないものは動けない。やれないものはやれない。「何をいつているんですか。塾はやらせて伸ばすのが仕事でしょ。」と非難されるのは承知でこう書いている。

●さて、自分の子だから心身とも成長してほしいと親が望むのは当然だ。ところが、中学受験、高校受験、そして大学受験が視野に入ってくる、子どもの成績が親の幸福を決定的に左右するほどの重さをもってくる。「心身」ではなく、成績向上と合格のみが親の願いとなってくる。ことが多い。上の子が勉強に関してうまくいっているときは、余裕たっぷりだった親が、下の子の成績不振に直面して「鬼ババア」に変身することも少なくない。

●実は、私もそういう部分を強く持つ親であった。子どもが二人いて、二人とも既に社会人でそれなりにしっかり生きてくれているが、私自身も極端な対応を度々したことを思い出す。それほどひどい状況にならずに済んだのは、まさにこの仕事をしてきたお陰と、子どもたちの周りにいる大人たちの配慮のお陰に他ならない。マシンガンのように子どもの悪口をいう親、成績が悪いことで冷たい視線を子どもに向けて親、自分が追いつめられていることを訴える生徒。

「この親子の関係を何とかしなければ(立場上、渋々引き受けることも少なくなかったが)」と思いがく中で見えたことが多かった。こんな対応はしてはいけない、ということの数多く学ばせていただいた。また、カミさんの勉強に関しての無関心ぶりもよかった。近所の大人、親類縁者が二人の子を大事にしてくれたこともよかった。感謝感謝である。

●生徒の親とはよくバトルをした。親が一生懸命であること、自分の子供を大事に思っていることは了解したうえで、この状況を少しでもよくするには、きれいごとではすまないと判断したときには、勇気をふりしぼって議論した。失礼なことをずいぶん申し上げたこともある。

●お預かりしている御家庭の親と子。共に良くなつてほしいという気持ちは今も変わりはない。そして、「勉強」や「受験」が一定の価値と意味をもつことも了解している。そのうえで、提案がある。①自分の子がどれくらいまでは伸びるか、冷静に考えてほしい。②成績が悪いとき、勉強が続かないとき大半の生徒は実は悩んでいる。そのとき必要なものは、子供をなじることではない。子供の気持ちを聞くことである。子供だから(高校生でも幼い)逃げるし、他人のせいにするし、何よりも言い訳の天才である。それに腹を立てても状況は変わらない。聞いてやる。そして、本当はどうしたいのか一緒に探してやる。言葉だけ丁寧にしてもバレル。詰問していることはすぐに伝わってしまう。怒りの感情が心の中を支配していても、一呼吸おいて、その子が生まれたときのこと、幼稚園に入ったときのことなど思い出して粘り強く聞くことが

必要である。「そうはいってもこの成績では?」と思われるかもしれない。しかし、今までのやり方で成功しなかったのは親自身よくわかってはいるはず。この状況を少しでも良くするにはどうするか考える必要がある。

●息子を血だらけにしたこともあった。三年間口をきかないこともあった。でも、よくぞ育つたと思っている。尊敬もしている。

自分の判断や言動が決して正しいわけではなかったことも了解している。



●あなたが生み育てた命。育てることは大変だけれども、お互いよくなるために思いつきではなく、真剣に考えていきたいものです。マイケル・ゴードン『親業』などは参考になると思っています。(小林(健))

### 子育て奮闘記①

●私には、三人の子どもがいる。今回は、その中の1番目、長女の話を書きたいと思う。

●小学2年生になる長女は、算数が苦手である。決して出来ない訳ではないのに、苦手意識ができてしまっているのだと思う。

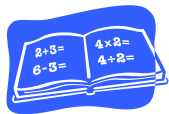
●学校で、毎日音読と計算カードの宿題が出る。国語の得意な娘は、国語の教科書をすらすら読む音読はあつという間におわり。続いて計算カードだが、こちらはそうはいかない。時に悔し涙を流すことさえある。

●計算カードは、足し算と引き算で全4種類。その中から2種類指定されていて、タイムを計る。小さな手にカードを持ちながら、指を折って数え

るという、たどたどしくも、一生懸命に計算している。その内、だんだん集中が切れていく。ちらっとタイマーを見る。タイムが気になるらしい。「おわり」。でも、昨日よりタイムが遅くなっている。タイムを表に書き込むのを横から覗き込み、娘も悔しさのあまり、ついこんな言い訳をする。

「他のクラスは、式言わなくていいんだもん!」  
●何がいけないんだろう?原因を考える。あきらかに集中していないせいもあるが、どうも得意な式と苦手な式があるようだ。また、同じような式なのに、それに気付かずいちいち式のとおり指を折って計算している。例えば、5+2と2+5。こちらとしては、大きい数字に小さい数字を足せば、計算が楽だと瞬時に判断できるが、娘にその発想はない。そこで、説明してみる。でも伝わらない。できない娘、説明が伝わらない父親。お互いイライラして、つい言い過ぎてしまうことが多々ある。

●子どもに『気付き』の瞬間を与えてあげたい。そのために、褒めたり叱ったり、あの手この手で工夫してみるが、結局つい言い過ぎ、反省の日々……。娘が生まれて8年、私も父親になってまだ8年、ということだろうか。



●ちなみに、娘のプライドのため付け加えておくが、去年は5分程かかっていた計算カード。今では30秒で終わられる!ただ、そろそろ始まる九九……。娘の苦勞が、今から目に浮かぶ……。その話は、またの機会に。(森)

#### ▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。